

わが国における障害者武道の普及とその対策について

—武道の研鑽が障害者にどのような影響をもたらすものか—

中島 豺* 橋本 昇** 徳安秀正** 松井完太郎*** 柏崎克彦*** 濱田初幸****

(*国士舘大学 **東京有明医療大学 ***国際武道大学 ****鹿屋体育大学)

An Inquiry to the Methods Employed in and the Spread of Budo for Disabled Persons in Japan

— What is the Effect or Benefit Resulting from the Study of Budo for Disabled Persons —

Takeshi NAKAJIMA* Noboru HASHIMOTO** Hidemasa TOKUYASU**

Kantaro MATSUI*** Katsuhiko KASHIWAZAKI*** Hatsuyuki HAMADA****

(*Kokushikan University **Tokyo-Ariake University of Medical and Health Sciences

*** International Budo University ****National Institute of Fitness and Sport in KANOYA)

ABSTRACT

Budo, the study of the martial ways, is just one of the traditional cultures of Japan. In this study we seek to identify the role of budo with respect to persons with disabilities, the physical and mental benefits of the martial arts study when applied as a therapy. In order to evaluate any such effectiveness, it is first necessary to clarify the methods of implementation and results, and thereby determine the value of implementing budo in this role. For this study, we examine the pioneering work being done in the Northern European country of Sweden, where actual programs are being conducted. The trends and methods of the budo training for disabled persons there have been indentified and analyzed. Based on this research we wish to consider the possibilities for utilizing budo training for disabled persons in Japan.

I 研究目的

日本の伝統文化の一つである武道が国際社会の中でどのような役割を果たしているかを知り、障害者に対し、身体面・精神面のケアとして、また武道セラピストとして武道を応用した場合の方法とその有効性を明らかにし、さらに武道そのものの価値を認識しながら、障害者への武道療法を先駆的に実施している北欧の国スウェーデンの実践的研究の動向を分析し、わが国における障害者に対する武道の応用とその可能性

を検討することを本研究の趣旨とするものである。

なお、平成24年度より公立中学校に於いて武道の必修化が決まり、各武道競技団体連盟ともに千載一遇のチャンスとしその対策に全力を注いでいる現状の中にあって、武道の特性上から鑑み障害者にとっても、日本の伝統文化の一つである武道を障害者に向けその効力を遺憾なく発揮できるものと推察される。

① 研究の学術的背景について。

国士館大学武道徳育研究所主催「国士研究会」を通して本研の重要性を見出した。

＊2004年「障害者と武道」について。講師：村井正直博士(社会福祉法人・わらしべ会)

＊2005年「武道が平和活動に貢献するには」講師：山下泰裕教授(東海大学)

＊2006年「障害者武道こうしゅう会」講師：松井完太郎教授(国際武道大学)

＊2007年「子どもと武道」講師：菅野純教授(早稲田大学)

＊2008年「障害者武道について」講師：Mr. Pontus Johansson (SWEDEN)

＊2008年「International University Symposium Judo & Disabled people」 in France

＊2008年「国際障害者武道円卓会議」講師：Mr. Pontus Johansson (SWEDEN)

＊2009年「障害者武道こうしゅう会」講師：Mr. Pontus Johansson (in SWEDEN)

＊2009年「武道必修化について一父兄が期待するもの」於：国士館大学

＊2010年「武道の研鑽が障害者にどのような影響をもたらすものか」於：京都大学

＊2009、10年「全国視覚障害者学生柔道大会」共同開催(静岡県浜松市)

② 研究期間内の実績について。

＊日本の伝統文化の一つである武道が潜在的教育力を障害者に普及・活用方法と研究。

＊平成24年度より実施される中学校武道必修化にともない、特別支援学校体育実習に武道力の導入。

＊日本国内だけでなく、諸外国とも連携を持ち広く世界的共通意識の高揚に役立てる。

＊柔道はオリンピック競技種目として世界に普及・発展していることを活用し、柔道を基盤として日本の伝統文化である武道を障害者の自立に役立てること。

③ 本研究の学術的な特色、独創的な点及び予想される結果と意義。

＊教育の機会均等の条文に「すべての国民は等しく、その能力に応ずる教育を受ける機会を与えなければならないものであって、人種、信条、性別、社会的上差別されない。」とあるが、障害者については何ら明記されていなかった。

昭和22年以後の学校基本法に、聾唖学校は「聾学校」に変わり、盲児への義務教育を行う学校となった。同時に、知的障害者、肢体不自由者、病弱者(身体虚弱

者)のための「養護学校」の制度が作られた。こうして「盲学校」「聾学校」「養護学校」の3種の学校が、特殊教育を行う学校として、法制化された。

平成18年の教育基本法改定により、国及び地方公共団体は、障害のある者が、その障害の状態に応じ、十分な教育を受けられるよう教育上必要な支援を講じなければならないと明記されている。

《武道の特性とは》

単に相手と相互に対峙する中で、身体を制御する技能を用いて競い合うだけでなく、その技能の錬磨を通じて、精神性を高める特徴がある。またその技能の錬磨過程においては、心身統合の動きが作用し、精神的・心理的な態度形成に良い変化をもたらしうるとされている。このように、心身の統合性の高い武道は、欧米諸国においては既に、心に病を持つ精神障害者に対し、運動療法として応用が可能であることが明らかにされている。

武道は、先人達の努力により広く世界に普及発展していることは承知の事である。また我が国においての武道と教育との関わりはすでに深いものがあるが、武道が福祉や医療の領域にどこまで関ることができるかを考察し、日本発祥の武道が21世紀の国際社会の中でどのように貢献できるのかを知り、障害者に対し、身体面、精神面のリハビリテーションとして、また武道セラピストとして武道を応用した場合の方法とその有効性を明らかにし、さらに武道そのものの価値を再認識しながら、障害者への武道力療法を先駆的に実施している北欧スウェーデンの実践研究の動向を分析し、わが国における障害者に対する武道指導の活用とその可能性を検討することを本研究の目的とする。

《教師とセラピスト》

教師はセラピストを兼ねることであり、特に慢性の精神病のクライアントと気分を害された思春期の若者に接する時などは信頼できる、啓蒙的な権威者が必要とされる。教師でもあるセラピストらは、クライアントへの思いやりと、安定した制度の保証の中でクライアントに接し、加えて個々のセラピストは専門的なガイド、代理人、親のように、かつ友として演じなければならないと述べている。そして、療法的な関係は明確に倫理に基づいた中で保持されることを強調している。次の例は、クライアントへの責任の取り方や彼の人生の中で前例のないほど効果をもたらした多くの療法で獲得した方法を示した。

《身体療法》

柔道練習についての効果は、主に身体の局面で得られる。療法の一つとしては、身

体に焦点を合わせるテクニックによって可能とされている。

柔道の有段者で精神療法医のフェルデンクライス(1942)は、治療の応用で修正された形式の柔道練習の効果を紹介し、脳性小児麻痺、盲目、精神遅滞や注意欠陥の傷害を持つ子供たちを対象に、身体と心理社会的なレベルを改善した例を取り上げている。

例として女性のクライアントが男性だけの柔道クラスに参加し始めた後、男性を攻撃するのをやめるようになり、精神的に屈折した人々には効果的であることが確かめられたことを報告している。

症例：若者が8年間以上、家族に対して行った物理的な暴力を伴った狂気な事件のために7回も病院に引き渡された。彼は処置のフォローアップを断つたが、最後の入院中に、躁鬱病剤の投与、心理療法、柔道、そしてランニングの運動療法などを処置され、実践した結果、快方に向かい、次の効果を生み出した。

1. 退院後に入院中の決まりを継続して固守出来るようになったこと。
2. 躁鬱病剤を3年後に中止出来たこと。
3. 家族関係が正常化したこと。
4. スポーツインストラクターの指示したトレーニングの維持と経済的な自己支持。
5. 過去の2年間、他のクライアントの療法とリハビリを支援していること。

*参考文献：佐々木武人「柔道による障害者への運動療法について」福島大学教育学部論集、第75号 pp3,4,5 2003

【事例報告】

《村井の柔道療法について》

はじめに

わらしべ会の柔道は医師で創始者である村井が幼少期からの柔道の経験を通して障がい者の精神・身体両面の発達・発育を目的に始まった。

開始当初は身体障害者対象におこなっていたが、平成8年以降知的障害者施設、デイサービス事業、地域活動支援センター事業などの運営を行うことにより、その対象者は身体障害者のみであったところから知的障害者、引きこもりの青年などに広がっていった。

柔道の活動を通して対象者の様々な変化を感じながら日々稽古に取り組んでいる。

今回このような発表の機会をいただき、柔道の活動を通して対象者の様々な変化を感じながら日々稽古に取り組んでいます。

【事例1】：運動として柔道の活用が期待できるケース

基本情報

■ 氏名：AK氏(女性)昭和43年2月1日 生まれ

■ 脳性まひ失調型

まず、事例1は運動として柔道の活用が期待できるケース、AKさん女性を上げたいと思います。

AKさんは昭和43年2月1日生まれ(40歳)女性。障害名は脳性まひ失調型です。

出生時は普通分娩。黄胆ややきついという状態でした。これについては母が第2子を妊娠の際の諸検査で血液型不適合であると判明。生後11ヶ月までは普通にハイハイもしていた。生後11ヶ月目に38度の発熱。O大病院に入院。3年間入退院を繰り返す。入院中、脳性麻痺の診断を受けた。就学前はO整肢学院、W園利用リハビリをおこなっていました

T養護学校小学部入学。その後中学部・高等部進学。昭和60年3月卒業。

昭和60年9月1日、当施設入所～ 在期23年目となっています。

■ 起居動作：寝返り、起き上がり、座位保持

自立：立ち上がり、立位保持・つかまり立ちレベル・

移動：車椅子使用(リハビリレベルで歩行器歩行可能)失調症状(+)

■ ADL 食事、更衣自立

入浴、排泄一部介助

■ 性格傾向 自閉的な傾向(+)

自傷・他傷(+)

起居動作レベルは寝返り、起き上がり、座位保持は自立。立ち上がり、立位保持はつかまるものがあれば可能。移動は普段は車椅子使用ですがリハビリレベルで歩行器歩行可能です。失調症状があり動作全般において不安定で歩行はワイドベースです。

ADLは表記の通りです。

性格傾向は自閉的な傾向があり、生活の中にこだわりや儀式的行為が見られます。また、情緒不安定で大声で他者を言語的に攻撃したり、他傷、自傷が見られることもあります。

言語的コミュニケーションは可能であるが理解などは低い状況です。

■ 血圧、脈拍の比較

	血圧	脈拍
平常時	120 / 60	70
歩行器歩行	変化なし	
歩行棒内歩行	変化なし	

	血圧	脈拍
エルゴメーター	変化なし	
柔道稽古	152 / 97	109

最近、年齢が30歳を超え、体重増加傾向、歩行機能低下など加齢による様々な問題が出てくるようになりました。そこで一般にもおこなわれている有酸素運動を行ってもらいこの加齢による様々な影響に歯止めをかけようと思いました。

有酸素運動として本人が行える形で歩行を行ったり自転車こぎ運動を行ってもらいましたが、血圧や脈拍といったバイタルサインの変化はほとんど見られず十分な運動効果がバイタルサイン上はみられませんでした。そういった中、運動の機会の一環として今年3月から柔道取り組んでもらっています。

歩行が不安定な彼女に歩行練習の動機付けとして立ち技に取り組んでもらうつもりでしたが、寝技の練習彼女が息切れする様子が見られました。運動で息切れする姿は職員にとっては驚きでした。当初は本人の機能より少し高いレベルの動作である立ち技で運動効果を求めていましたが、本人の機能に適した寝技で運動効果が見られました。

寝技では血圧脈拍共に上昇しバイタルサイン上は十分な運動負荷が与えられているという結果が見られました。

ここでAKさんの歩行場面を見ていただきます。平行棒内で歩行練習をしている場面ですが明らかに力強い歩行とはいえないです。

■ 考察

知的障害のため抽象的指示に対して理解困難
目的が理解しやすい(本能的)

それでは彼女にとって柔道が適切な運動になったかを考察したいと思います。

まず、第一に知的障害をもつ彼女には歩行で「はやくあるく」や「がんばってあるく」「力つよく」などの指示は抽象的で理解できません。

柔道は技や組み手など難しい要因はあるが組んで倒すという部分においてはいたって単純なことを求められており、自分のやったことによって相手がたおれたか否かというわかり易い結果として表されます。これが自然に彼女が動くということにつながると考えます。



■ 考察－１

運動方法が理解できていない

組み合わせスポーツであり、利用者同士では闘争心によって、指導者との練習は運動負荷の調整が可能。

次にこれも知的障害に起因するものですが彼女に「はやくあるけ」「一生懸命あるけ」といわれても何がそれにあたるか理解できません。その点柔道は相手を倒すということに限定すればわかり易くそこに利用者同士が組み合わせれば闘争心もかりたてられます。また、指導者との練習では運動負荷を調整したり肢位をかえて練習することが出来ます。

■ 考察－２

失調症状のため歩行やエルゴメーターでは有酸素運動レベルの運動負荷が困難であった。

寝技中心の課題設定で座位臥位でダイナミックに身体を動かすことが出来る。

次の要因として考えるのが柔道の競技特性として様々な身体状況に対応できるルール設定が可能であるということです。というのは本症例の場合失調症状のため運動速度や抵抗を上げることができず、運動の抵抗を上げると運動が困難になります。彼女の場合は寝技中心の練習課題として膝立ちや臥位での練習することができ、激しく身体を動かすことが出来ます。こういった柔道の運動面での特性と前述した認知面の特性が合わさることで彼女に十分な運動負荷を与えることが出来たと考えます。

■ まとめ

- ・柔道の組み合った二人によって成り立つ競技という特性。
- ・自分の行ったことに対するわかりやすい反応。
- ・AK氏に対する運動効果を生み出したのでは？」（仮説）

このAKさんの事例を通し、彼女に運動効果を提供できた要因には柔道は一人で行えるものではなく二人が組み合ってこそ成り立ちます。そこでわかりやすい反応が見出されます。

【事例２】放置しておけば引きこもりになったかもしれない軽度知的障害の若者の支援に柔道が役立った事例。

■ 現在19歳 軽度知的障害

■ 2007年養護学校の先生から引きこもりになる可能性を指摘される。

- 本人の就労・活動意欲はない
- 養護学校時代はパソコンのある日のみ通学(週2日)
- 家族からの支援は見込まれない。

次に事例2として放置しておけばニート引きこもりになったかもしれない軽度知的障害の若者の支援に柔道が役立った事例を紹介したいと思います。

T氏19歳。軽度の知的障害を持っておられます。2007年3月養護学校高等部を卒業する際、学校の先生から3月卒業の生徒で卒業後の進路が決まっておらず、日常の行き場がないため卒業後引きこもりになるかもしれない生徒がいる。」と当法人地域生活支援センターに相談があった。

当時の状況としては養護学校にはパソコンの授業があるときのみ通学し、そのほかはほとんど欠席してしたとのことです。本人は就労や活動に対して意欲はみられず、卒業後の進路が決まらないという状況であった。また、家族も知的障害であることから生活基盤も不安定で家族からの支援は期待できないという状況も合った。

■ 地域生活支援センターでの活動

- ・ パソコンやゲーム
- ・ キャッチボール

本人の言葉が増える。笑顔が見られる。関わるスタッフも増える。

地域生活支援センターでの活動は本人の興味を持てるものを中心に参加し易い環境を作った。その中から体を動かすものとしてキャッチボールも取り入れるようになり、本人の言葉や笑顔が増え、関わるスタッフも増えた。

センター通所半年が経過し、他の通所者や同級生の卒業後の活動の見学により本人からバイトをしてみようかという発言がみられた。わらしべ会の就労支援事業所の「セルフわらしべ」との連携で企業内実習を行い、2週間の実習を無事終えた。一方、バイトの面接を受けるが「経験がない」という理由で断られ自信を失うということもあった。

- 今年3月から柔道参加。
「柔道のある日は時間が早くすぎるなあ？」
「身体を動かすことが好きなのかなあ？」
- 彼の興味に対しての新たな発見。
- 考察

運動面・精神面・社会面の育成など療育的視点を持った柔道の可能性をこの

ケースを通じて感じられる。

若者の凶悪犯罪が増加している現代社会において、犯罪に至らなくてもニート、引きこもりなど社会と関わろうとしない若者が増え社会問題になって久しい。また、最近そういった若者の中には発達障害など先天的な脳機能障害がある場合があることも指摘されている。



運動面・精神面・社会性の育成など柔道の効果については今後も検討をしていく必要性を感じているが療育的視点をもった柔道の可能性がこのケースを通じて考えさせられます。

【おわりに】

■ 柔道修行の目的

「精力を最善活用し、相助相譲、自他の共栄を実現することにある。」（嘉納治五郎先生）

■ 「背負うこそ柔の道の極みなり 投げ固むより 背負え世の人(を)」（村井正直）

主題：「わが国における障害者武道の普及とその対策について」

平成23年度の計画（国内での障害者武道の実態調査）

「国内における特別支援学校での武道教育の現状とその実態調査」

「特別支援学校における体育スポーツ実技と武道実技の調査」

平成24年度の計画（外国での障害者武道の実態調査研究）

「北欧スウェーデン国ルレア工科大学での障害者武道教育の指導法の習得及び、その調査」

平成25年度の計画（完成年度）

「実験の整理、アンケートの集計・統計処理、分析、結果、考察、まとめ」

平成23年度の計画：「日本国内の特別支援学校における体育スポーツの実態調査」

- ① 東京都内の特別支援学校（都立54校1分校、区立5校）における体育実技の実態をアンケート調査・聞き取り調査をする。（担当：中島、橋本、徳安、松井）
都立青鳥特別支援学校での授業支援（図1：後方受け身の導入方法）を行い、A～Dクラスに分け、授業開始（10月～12月）時と3ヶ月経過後の成果を、身体動

作ビデオカメラで撮影し、またフォースプレートで記録し分析を行う。(中島・橋本・徳安・松井)



①長座の姿勢から両腕を肩の高さに上げ伸ばし首をやや折る。



②背を丸めて後方に倒れながら、ローマ字のUの字をつくり、首と背中を打たないように練習をする。



③後方に倒れながら背中が畳につくか、その少し前に両腕で強く受け身を取る。

2010年度都立青鳥特別支援学校(柔道時間割表) A(重度)～D(軽度) 50分授業

		月			火			水			木			金	
	1年	2年	3年	1年	2年	3年	1年	2年	3年	1年	2年	3年	1年	2年	3年
1限															
2限	D		D	C	A			D	D	A				B	C
3限				A		C						B	D		D
4限		D			C		D			C	C		B		A
5限				B	B						A	A		D	B

研究計画・方法(つづき)

② 千葉県、鹿児島県、鹿屋体育大学武道学科介護実習における実態。

特別支援学校の体育実技・スポーツ実習の実態調査および授業支援。

研究分担者(鹿屋体育大学・准教授)の濱田初幸氏の開発した初転君を使用する。

前回り受け身補助機能付き。(特許第4051450：平成19年12月14日 取得)

(図：初転君を使用しての前回り受け身の導入方法。)



◎初転君による前方回転受けみの上達法の改良。(中島・橋本・徳安・松井・柏崎・濱田)

①右前方回転受け身の場合。

右袖口1番から、肘2番、右肩3番、背部4番、と青色のラインに沿って右斜め前方に回転する。

②左前方回転受け身の場合。

①の逆で、左袖口1番から、肘2番、右肩3番、背部4番、赤色のラインに沿って左斜め前方に回転する。



平成24年度の計画：

「スウェーデン・ルレオ工科大学理学療法士養成課程」への視察および研究」

① スウェーデン工科大学訪問。(濱田・中島・橋本・徳安・松井)

医療機関から委嘱を受けた武道資格認定理学療法士による武道セラピの現場に参加して理論と実技を習得する。

② スウェーデン工科大学より講師の招聘(ポントス・ジョハンソン 他2名)

国際障害者武道協会会長 ポントス・ジョハンソン氏・他2名を招聘して、「障害者武道こうしゅう会」を開き、障害者武道の過去・現在・未来について深く研究し、合わせて啓蒙を図る。(中島・橋本・松井・柏崎・濱田・徳安)

③ 東京都立青島特別支援学校での体育授業を支援し、保様、身体動作の分析を行い2年間データーの集積を行う。(中島・橋本・松井・徳安)

平成25年度の計画：「障害者武道実施に伴う指導書の作成」

① データーの整理

平成23年度、24年度に東京都立 特別支援学校 A, B, C, D クラスにおける歩様・身体運動の分析とその検討。(中島・橋本・松井・徳安)

スウェーデン式武道セラピ療育方法と日本での障害者武道療育とを比較検討し、指導書の作成の資料作りを行い、併せて特別支援学校のアンケート意識調査表の分析を行う。(中島・橋本・松井・柏崎・濱田・徳安)

② 指導書制作製本

資料の分析をもとに障害者にとって安全かつ興味を持つ武道への導入方法を中心に武道の基礎的訓練、投げ技、固め技の指導書を作成する。(中島・橋本・松井・柏崎・濱田・徳安)

① 現在の研究施設・設備・研究資料等、現在の研究環境の状況

* 本研究の現在の状況をみて、施設・設備・資料・環境等は全く存在しないが、特別支援学校での補助的指導並びに、生活単元学習としての武道の採用及び、アンケートによる実態調査を行うことを研究の第一歩とする。

② 連絡調整状況

* 研究分担者が他県である故、メール等々で、その実態調査を実施する予定である。
* 年2回程度の研究会を実施する予定である。

③ 研究成果の社会・国民への発信

* 国士館大学及び研究分担者等の各大学ホーム・ページを利用して普及活動に着手する予定である。
* 特別支援学校等での実技補助指導をもって武道力の効果の発揮。

* 成果について

- ・ 補助金基盤研究(C) (2) 研究経過報告書(100部製作)
- ・ 地域、小学校に於いて少年柔道に活用し、その成果充分に発揮されたと思われる。
- ・ 地域社会への貢献となる。

- 1: アンケート調査等の趣旨について調査対象者に説明。
- 2: 研究の協力・途中での撤回は調査対象者の自由意思であること。
- 3: 得られた計測・データー等は、統計処理のみに使用すること。
- 4: 画像データー・計測データーの管理・公表において匿名性を確保すること。

① 設備備品費の指導用柔道着(特許名: 初転君)

初転君3組及び、柔道衣15着を作成し、中島、橋本、濱田、それぞれが指導用に使用する。

この初転君は、研究分担者の濱田初幸氏が平成24年度より実施される、全国公立中学校における武道の必修化にともない、柔道実技における安全に「受け身」が

習得されるために開発されたものであるが、これを特別支援学校にも採用する。

(前回り受け身補助機能付き、特許第4051450：平成19年12月14日取得)

*平成23年度は、主に国内での特別支援学校での実態調査及び武道力の普及活動に努める。

- ② キヤノン・デジタル一眼レフカメラ EOS-ID MarkVI 1台 は記録用として。
- ③ ソニー・ビデオ HDD HDR-XR1001台は身体動作分析、歩様分析を行う。
- ④ ソニー・ノートPC、VAIO (1台)は、統計処理・分析・記録等々に使用する。
- ⑤ 旅費は研究分担者等の事前の打ち合わせ、学会等において成果発表に充てる。

*平成24年度は、スウェーデン国のルレア工科大学を中島、橋本、濱田が訪問し、障害者武道の訓練実態調査を行う。

国際障害者武道協会会長ポントス・ジョハンソン氏および他2名を招聘し日本国内にて「障害者武道こうしゅう会」を開催する費用に充当される。

*平成25年度は、これまでのアンケート調査等の集計、資料分析、通信費、査鉦代及び、指導書作成のための印刷製本に充てる。

設備備品費の明細

平成23年度(数量×単価)(設置機関)

◎キヤノン製 1600 万画集 デジタル一眼レフカメラ EOS-ID MarkVI
(1台×@100)(国士舘大学)

◎ソニー製デジタルHDビデオカメラ
レコーダーHDR-HC9 (1台×@100)(国士舘大学)

◎ソニー製・ノートPC VAIO
F VGN-FW73JGB (1台×@100)(国士舘大学)

◎初転君一式
*内訳；(柔道着・初転君シート・DVD) 3×@100

国士舘大学・東京有明医療大学・鹿屋体育大学

⑤柔道着のみ (15着 × @35)

消耗品費の明細

23年度 品 名

テープ

EPSON写真用紙 CD-R・DVD-R

【まとめ】

古代ギリシャのポリス・スパルタでは、子どもは国の財産としたが、12歳ごろから軍事訓練を課せられ、その過程において身体に障害を生じた子どもを殺害し、生き残ったものだけを市民として育てたとある。(スパルタ教育即ち弱肉強食)

さて、日本における障害児教育について述べることにする。

明治5年の学校制度による近代教育制度の創始は、わが国教育史上に一時期を画するものであるが、障害児教育については賛否両論であった。

【明治前期】—障害教育をめぐる二つの道—

福沢諭吉翁は、「有用である」と主張し欧州での「哑院」「盲院」などを紹介したが、1871年(明治4)、山尾庸三氏は「廢人」「廢疾者」と称して「無用」とした。しかし、東京では1875年(明治8)「訓育所」の設立や、1884年(明治17)「訓盲哑院」が官立となる。

京都においては聾哑児の教育を開始し、1878年(明治11)京都盲哑院開設(日本での最初の障害児学校)、翌年「京都府盲哑院」と改称、1889年(明治22)京都市に移管。

視覚障害児、聴覚障害児の教育が先行し「手に職を」という発想から、職業教育などを中心に行っていた。(「無用」=「廢疾ノ者」は不就学であった。)

【明治後期から大正前期】

1891年(明治24)「孤女学院=滝乃川学園」日本最初の知的障害児施設。

1900年(明治33)「瘋癲白痴・不具廢疾」「病弱・發育不全」は就学義務。

1907年(明治40)文部省は、師範学校付属小学校に「特別学級」開設を奨励する。

【大正後期～昭和初期】

1917年(大正6)白十字会「林間学校」を設立。(虚弱児のための「特別学級」)

1932年(昭和7)日本で初めての肢体不自由児のための学校が開設。

【戦後改革期の障害児教育】

日本国憲法1946年(昭和21)公布、1947年(昭和22)施行。

第26条 すべての国民は、法律の定めるところにより、その能力に応じて、ひとしく

教育を受ける権利を有する。

昭和30年代以降「養護学校」の法律はあるけれども「設置義務」は当分の間実行されなかった。

1959年(昭和34)中央教育審議会「特殊学級」設置を義務づける。

2001年(平成13)旧来の“特殊教育”から“特別支援教育”という呼称を使用。

2005年(平成17)厚生労働省が障害者自立支援法等法律案を国会に提出。

2007年(平成19)特別支援教育は正式に実施されることとなった。

文部科学省の平成20年度の中学校学習指導要領の改訂によれば、「教育の目標」第2条第5項に「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと。」により、中学校の保健体育での武道・ダンス科目が必修として取り入れられることが決定した。

「武道は、武技、武術などから発生した我が国固有の文化であり、相手の動きに応じて、基本動作や基本となる技を身に付け、相手を攻撃したり技を防御したりすることによって、勝敗を競い合う楽しさや喜びを味わうことができる運動でありまた、武道に積極的に取り組むことを通して、武道の伝統的な考えを理解し、相手を尊重して練習や試合ができるようにすることを重視する運動であると位置づけている。」しかし、特別支援学校においてはなんら必修とされていないのが現状である。

「特別支援教育」とは、障害のある幼児児童生徒の自立や社会参加に向けた主体的な取り組みを支援するという視点に立ち、幼児児童生徒一人一人の教育的ニーズを把握し、その持てる力を高め、生活や学習上の困難を改善または克服するため、適切な指導および必要な支援を行うものです。」

平成19年から、「特別支援教育」が学校教育法に位置づけられ、すべての学校において、障害のある幼児児童生徒の支援を充実していくこと。

日本が誇る我が国固有の伝統文化の一つである武道が一般学校教育だけでなく特別支援学校においても実施されんことを切に願うものである。(文責：中島 豺)

—— 論文資料 ——

【2006年以降】

19. 中島 𪛶:「武道・スポーツ科学研究所報」国士館大学、体育学部附置体育研究所、年報第12巻、pp11～24, 2006 (査読有)
20. 松井完太郎、蒔田実、柏崎克彦、高見令英、木村寿一、阿部哲史、井下佳織:「海外に於ける障害者武道普及の可能性(第3報)」武道・スポーツ科学研究所年報、第11号91-100 2006 (査読有)
21. 濱田初幸:前回り受け身機能付き上衣「初転君」前回り受け身を初心者対象に指導する際に安全で理解しやすい柔道衣を考案した。前回り受け身補助機能付き。[特許第4051450号 平成19年12月14日] 2006年

【2007年以降】

15. Takeshi NAKAJIMA, Jung Jin Park, Yasuhiko MORIWAKI, Shigeru MURAKAMI:「Applied psychological research for judo」The 5th International Judo Federation 2007 World Judo Research Symposium in Rio de Janeiro, BRAZIL, 2007
16. 第1回「障害者武道講習会」静岡県」講師:中島 𪛶、10, 11, 2007
17. 松井完太郎、高見令英、丸橋利夫、木村寿一、矢崎利加、井下佳織、アレクサンダー・ベネット、阿部哲史、マイク・ウォール、ポントス・ジョハンソン:「障害者への武道指導法確立のための事例調査研究」武道・スポーツ科学研究所年報、第12号121-126 2007 (査読無)
18. 松井完太郎、土居陽治郎、吉見譲:「公共スポーツ施設の指定管理者制度の現状に関する研究」国際武道大学紀要、第22号 23-35 2007 (査読有)

【2008年以降】

6. Takeshi NAKAJIMA:「International Association of Budo Culture for Disabled」SWEDEN (Lecturer) Feb 2nd～Mar 1st・2008 (査読無)
7. Takeshi NAKAJIMA:「International Seminar Judo for the Disabled」FRANCE(Lecturer) Jun 21, 22, 2008 (査読無)
8. 第1回「障害者武道講習会/奈良県」講師:中島 𪛶、5, 11, 2008
9. 第2回「障害者武道講習会/静岡県」講師:中島 𪛶、8, 11, 2008
10. 中島 𪛶、泉賢史、小森富士登:「国際障害者武道円卓会議」主催:国士館大学武道徳育研究所、23, 11, 2008

11. 松井完太郎、高見令英、丸橋利夫、木村寿一、矢崎利加、井下佳織、アレクサンダー・ベネット、阿部哲史：「障害者への武道普及方法に関する研究－動画共有サイトを利用した障害者武道に関する情報共有化の可能性－」武道・スポーツ科学研究所年報、第13号121－128 2008（査読無）
12. 宇都宮奈美、濱田初幸：「知的障害者における柔道療法」鹿屋体育大学学術研究紀要、第37号、pp31～44、2008（査読有）
13. 松井完太郎、高見令英、丸橋利夫、木村寿一、矢崎利加、井下佳織、アレクサンダー・ベネット、阿部哲史：「障害者への武道普及方法に関する研究－動画共有サイトを利用した障害者武道に関する情報共有化の可能性－」武道・スポーツ科学研究所年報、第13号121－128 2008（査読無）
14. 宇都宮奈美、濱田初幸：「知的障害者における柔道療法」鹿屋体育大学学術研究紀要、第37号、pp31

【2009年以降】

2. 第3回「障害者武道講習会/静岡県」講師：中島 貅、2009年8月8日
3. Takeshi NAKAJIMA, N.Hashimoto, Y.Hibakoand R.Okada 「Applied psychological Research for Judo」 The 6th International Science of Judo Symposium Rooterdam in Netherlands 2009 Poster presentation(Certificate of Award) and Chairman25/8/2009（査読無）
4. 中島 貅、森脇保彦、飯田穎男、藤田主一、橋本昇、徳安秀正：「柔道の応用心理学的研究⑧」－国際障害者武道円卓会議－日本応用心理学会第76回大会発表、九州大学、2009p30 13, 9, 2009（査読無）
5. 松井完太郎、高見令英、丸橋利夫、木村寿一、矢崎利加、井下佳織、アレクサンダー・ベネット、阿部哲史：「障害者への武道普及方法に関する研究－高次脳機能障害を例とした情報の記述・共有化について－」武道・スポーツ科学研究所年報、第14号（査読無）2009

【2010年以降】

1. 中島 貅、森脇保彦、泉賢司、小森富士登、藤田主一、橋本昇、徳安秀正：「武道の研鑽が障害者にどのような影響をもたらすものか」－応用心理学における武道療法の役割－（日本応用心理学会第77回大会発表、京都大学、話題提供者（Mr, Potus Johansson、仲野猛、東隆史）指定討論者（田中真介、角杉昌幸松井完太郎）自主企画ワークショップ、11, 12, 9, 2010（学会発表）2010年9月11日、12日